

1992年10月に「広報二松学舎」として創刊された「二松学舎新聞」は、今号で100号を迎えました。二松学舎の歩みをはじめ、大学の教育・研究活動や学生の取り組み、両附属校の生徒の活躍など、さまざまなニュースを届けてきた本紙。これまでの紙面を振り返りながら、100号という節目に、二松学舎新聞の歩みをたどります。また、今号は記念として、3・4面が創刊号(1992年10月10日発行)の復刻版となっています。ねこ松とともに楽しみください。

— 創刊100号に寄せて —

正解なきAI時代に、気高き問いを放て

学校法人二松学舎 理事長 水戸 英則



1992年10月の産声から三十余年。熱き鼓動を活字に刻んできた「二松学舎新聞」(創刊当時「広報二松学舎」)が本年10月、記念すべき創刊100号の金字塔を打ち立てました。歴代編集委員と、本紙を支え続ける皆様に心から敬意と感謝を捧げます。

この100号への道のりは、本学の絶え間ない自己変革の軌跡です。1995年の国際交流センター開設に始まり、附属高校新校舎竣工、大学院国際政治経済学研究科の設置、広報誌「學」創刊や教育開発・キャリア・情報各センターの開設など、次代を見据

えた教育の土台を盤石にしてまいりました。

進化はとどまりません。2004年、新九段キャンパス(1・2号館)を竣工、「東アジア学術総合研究所」設置を起爆剤に「21世紀COEプログラム」に採択され、世界的な漢学研究拠点としての地位を確立しました。以降も九段キャンパス(3・4・5・6号館)の新設や都市文化デザイン学科、歴史文化学科、国際経営学科、大学院国際日本学研究科の設置を進めました。また、甲子園で躍進する附属高等学校や、附属柏中学校・高等学校と共に学舎全体が力強い成長を遂げ

ています。本年には新たに大学院文学研究科に歴史文化学専攻を設置しました。

生成AIが最適解を提示する現代において真に価値を持つのは、AIには生み出せない「新たな問いを立てる力」です。情報が氾濫する今こそ、深い人間理解と倫理観を養う人文社会学の叡智が社会を導く光となります。

「西洋を吸収するには、まず自らの東洋文化を学ぶべきだ」と喝破した創立者・三島中洲先生^{かつぼ}の建学の精神は、時代を生き抜く不変の羅針盤です。

「N' 2030 Plan」で築いた堅固

な財務体質等の成果を背景に、これからの「2040年問題」(18歳人口の大幅減少)やAI時代を力強く迎え撃つべく、現在「N' 2040 Plan」の策定を検討しています。豊かな伝統を礎に、チャレンジ精神を胸に新たな歴史を切り拓いていきます。

これまでの本学の軌跡を刻んできた「二松学舎新聞」が、今後も学内の動向を的確にお伝えするとともに、本学と皆様とを繋ぐメディアであり続けられるよう、一層努めてまいります。

附属高校野球部

ノーシードから躍進

粘り強く戦い抜き

東東京大会で準優勝



附属高等学校野球部は、全国高等学校野球選手権大会(以下、夏の甲子園)出場を目指し、第108回全国高等学校野球選手権大会東東京大会に出場した。

7月7日の葛西南高等学校との初戦を20対0のコールド勝ちで突破すると、その勢いのまま勝ち進み、岩倉高等学校や帝京高等学校などの強豪校との対戦でも勝利を重ねた。迎えた27日の決勝戦では、3年連続で夏の甲子園への出場を目指す関東第一高等学校と対戦した。試合は序盤からリードを許し、5回終了時点で9点差をつけられる苦しい展開となった。それでも選手たちは最後まで諦めず、6回に1点を返すと、9回には粘り強い攻撃で3点を奪い、スタンドの応援席は大きな歓声に包

まれた。最終的には10対4で敗れ、準優勝となった。

夏の甲子園出場にはあと一步届かなかったものの、ノーシードから決勝まで勝ち上がり、選手たちは最後まで全力で戦い抜いた。

今大会で発揮した粘り強さとチームの底力を糧に、さらなる高みを目指す選手たちの今後の活躍が期待される。



決勝戦を終え、表彰式に臨んだ野球部の選手たち

150周年記念事業

「漱石アンドロイド2.0」

「いのちの未来+」へ出展



学校法人二松学舎は、創立150周年記念事業の企画として、大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩研究室との共同研究で開発した「漱石アンドロイド2.0」を、高輪ゲートウェイシティの複合型ミュージアム「MoN Takanawa: The Museum of Narratives」の開館記念プログラム「いのちの未来+」(2026年7月25日～9月26日開催)に出展した。

漱石アンドロイドは、漢学塾二松学舎で学んだ文豪・夏目漱石をモデルとしたアンドロイドで、ロボット工学・アンドロイド研究の第一人者である石黒教授の監修のもと、創立140周年記念事業の一環として本学が制作。これまで教育研究活動などで活用されてきた。創立150周年記念事業では、AIをはじめとする先端テクノロジーを

取り入れ、新たなプロジェクトとして進化をめざしている。

「いのちの未来+」は、2025年の大阪・関西万博で石黒教授がプロデュースしたシグネチャーパビリオン「いのちの未来」をアップデートさせたプログラム。漱石アンドロイドは、来場者との対話体験を実施した。漱石の生涯や著作などに関する情報を学習したAIを搭載した漱石アンドロイドは、来場者からの問いかけに対して、自律的に応答するため、アンドロイドとの自然な対話を楽しめる展示となった。

創立150周年のテーマである「人文知とAI等テクノロジーの融合による共創知の創出」を象徴する漱石アンドロイド。今後、150周年の広報アンバサダーとしてさまざまな場面に登場する予定だ。

第100号 記念特別企画

二松学舎新聞の歩み

本企画では、第10号から第90号までの紙面（10号ごとの節目）に躍ったトピックをご紹介します。
法人・大学・附属校の「日々」を伝え続けた新聞の歩みとともに、二松学舎の歴史を振り返ります。

第10号 1995年5月25日発行

大学院の定員増と昼夜開講制始まる

バブル崩壊後、経済環境の変化や人々の生き方が多様化する中で、生涯を通じて学び続ける仕組み作りが求められるようになりました。本学でも、大学院（文学研究科）の定員増と昼夜開講制が取り入れられました。



第20号 1999年5月20日発行

1990年代後半は日本が本格的な高度情報化社会へと突入した時代。大学には、「情報センター」が開設しました。千代田（現 九段）キャンパスと沼南（現 柏）キャンパスを結ぶネットワークが構築され、パソコンの設置やインターネットルームの開設等施設面での整備が進みました。



第30号 2003年10月20日発行

新しい「知の拠点」をめざして

という見出しが躍る30号。教育研究環境の充実と学生にとって魅力あるキャンパスの整備を目的として、新九段キャンパス（皆さんが知る今の大学キャンパス）の建設が始められていました。本学における歴史的な転換点の一つといえますね。



第40号 2007年1月20日発行

附属沼南（現 柏）高校に、オーストラリア・カムデンの高校から5名の生徒による訪問がありました。カムデンとの交流は、千葉県沼南町（現 柏市）の国際交流協会とのつながりで行われたものです。「日本」を感じてもらう企画では、剣道場の見学が一番盛り上がったそう。同じく40号には、大学でも留学生スピーチコンテストや国際交流年末懇親会が行われたという記事もあり、大学・高校ともに国際交流に意欲的に取り組んでいたことがわかります。

第70号 2016年10月20日発行

創立140周年に向けて

2017年に迎える創立140周年に向けて準備が進んでいる漱石アンドロイドプロジェクトや記念式典、校舎ラッピングなどの事業を紹介。新学科として都市文化デザイン学科を開設する記事も掲載され、周年とともにさらなる飛躍をめざす本学の姿が伝えられました。



第50号 2010年5月10日発行

附属柏中学校来春開校

50号では、付設校として初めての中学校「二松学舎大学附属柏中学校」が2011年に開校することが取り上げられました。附属柏中学校については別刷での特集も組まれており、大きな期待が感じられます。特集号では制服がイラストで紹介されました。



第80号 2020年1月25日発行

2019年4月に、東アジア学術総合研究所が、その前身である「東洋学研究所」の創設から50周年を迎えたことが紹介されました。11月には、それを記念したシンポジウムが中国浙江省で開催され、日本と中国の研究者による発表や活発な討議等が行われました。

第90号 2023年5月20日発行

2年連続 7度目の春の甲子園出場

附属高等学校野球部が、2年連続7度目の出場となった第95回記念選抜高等学校野球大会（春の甲子園）。開催当時は、新型コロナウイルスの感染対策が緩和され、従来の大会の姿が戻りつつあった頃。紙面では、選手達の奮闘とともに、応援に駆けつけた多くの生徒や保護者、関係者が声援を送る様子も伝えられました。

第100号
記念
特別企画

歴代編集者が語る「二松学舎新聞」

二松学舎新聞は今日に至るまで何人もの編集者が関わり、さまざまな情報をお届けしてまいりました。「二松学舎大学新聞」、その前身を引き継ぐ「広報二松学舎」「二松学舎新聞」、各紙に込められた歴代編集者の想いに迫ります。

二松学舎舎友

岡村 幸男 さん

100号おめでとうございます。私が初めて編集を担当したのは『二松学舎大学新聞（以下、大学新聞）』の頃で、1974（昭和49）年5月1日発行の第156号です。当時は「活版印刷」の時代。一文字ずつ「活字」（はんこ）を手作業で拾い集めて版を作り、印刷していました。校正作業の際も印刷会社へ出向き、部屋を借りて行っていたものです。約20年編集に携わり、大変なことも多かったはずですが、振り返ると楽しかった思い出ばかりが浮かびます。特に印象深いのは、創立100周年を報じた第173号です。紙面は圧巻の10面構成となり、編集関係者や担当理事だけでなく、担当外の教授まで巻き込んで校正を行いました。あの熱気に満ちた光景は、今でもありありと思い出すことができます。

当時、大学新聞、そして『広報二松学舎』は、学外へ本学のありのままの魅力を伝える唯一のメディアであり、とても重要な役割を担っていました。私自身、そういった責任を持ちながら編集作業を進めていました。元編集担当者としては、その精神が今後の新聞作りにも変わらず継承されていくことを祈っています。



▲ 二松学舎大学新聞第173号〈1面〉

附属柏中学校・高等学校事務室
事務長補佐 馬淵 恭子 さん

入職直後、企画部広報課へ配属となり、「広報二松学舎」の編集に携わりました。広報課は、新設された部署だったため、学内からの期待を感じながら、3人の課員でスタートしました。

担当した中でも、特に記憶に残っているのが、「新九段キャンパス」を取り上げた2003（平成15）年10月20日発行の第30号です。大学の転換期に、新聞制作を通して立ち会えたことに加え、新聞の名称変更や二松学舎ロゴマークの掲載開始、紙面のカラー化などがあり、非常に思い出深いです。

新聞づくりは、企画、レイアウト、校正などを広報課3人で「ワンチーム」となっていました。当時は、手書きの原稿も多くありました。執筆者とのやり取りは、メールがまだ主流ではなく、フロッピーディスクやFAX、電話を使



◀ 二松学舎新聞第30号（1面）

用していました。校正作業は、新聞記者のハンドブックである「新聞用字用語集」を常に手元に置き、課全体で取り組みました。

当時の上司・先輩からは、紙面を仕上げるために必要なスキルだけではなく、仕事への取り組み方や姿勢を教えてもらいました。広報課時代の経験は、私にとっての基礎であるとともに、現在の業務においても大いに役立っています。



150周年記念事業のご紹介

学校法人二松学舎では、創立150周年を迎えるにあたり、さまざまな記念事業を実施する予定です。本号では、その一部をご紹介します。
今後も記念事業の情報をお届けしますので、どうぞご期待ください。（事業内容は現時点での予定であり、変更となる場合があります。）

事業一覧

● 特別事業

新長期ビジョン「N' 2040 Plan」	本学は「共創知によるウェルビーイングの涵養」を理念に掲げた。これは、大学が地域社会や企業、行政、市民、そしてAIと共に知を創造し、人々の幸福や社会の豊かさにご貢献することを意味する。この理念のもと、150年培った「人間中心の教育」を発展させ、AIと協働して社会の持続可能性に貢献する教育体制の構築を目指し、新たな長期ビジョン「N' 2040 Plan」を策定。2027年10月10日の記念式典にて公表する。
記念式典及び祝賀会	2027年10月10日に記念式典及び祝賀会を開催する。
150周年記念募金	記念事業である「柏キャンパスリニューアルプロジェクト(仮称)」や各設置校の教育環境整備、奨学金拡充をはじめとする学生・生徒支援の更なる充実に向けて「二松学舎創立150周年記念募金」への寄付金募集を行う。
「漱石アンドロイド2.0」版の開発	創立140周年記念事業で制作した漱石アンドロイドにAIを搭載し、自律対話可能なアンドロイドとして再開発。「人文知×AI＝共創知」を体現する存在として広く活用する。



● 記念誌の編纂及び改訂等

『二松学舎 150年史』編纂	創立から今日まで脈々と伝わる二松学舎の歴史と発展を振り返り、これまで編纂された九十年史、百年史等を踏まえ、創立者の想いや組織の価値観を記録するため年史を編纂する。歴史を詳らかに記録する「正史」とテーマで見る「テーマ史」の2種類を制作する。
『明治10年からの大学ノート』150周年版(改訂)	二松学舎の歴史と精神を幅広い世代の人々に伝えるために刊行した小史『明治10年からの大学ノート』の150周年改訂版を制作する。自校教育の一環として、引き続き大学の在学生および設置校の在校生に配布する。

● 創立者・三島中洲関連

三島中洲忌墓参の会	2027年は創立者・三島中洲の没後108年にあたる。5月12日の「中洲忌」頃に、富士霊園(静岡県)にある三島中洲のお墓を関係者で参拝する。
-----------	---



● 広報活動

周年広報(ブランディング)	周年を周知するための広報活動を段階的・戦略的に実施する。「漱石アンドロイド2.0」をアンバサダーとして活用する。
---------------	--

周年キャッチコピー、ロゴマークの制作

周年キャッチコピー「二松の『知』、第二章へ。― 共創の時代をひらく ―」およびロゴマークを制作。

特設サイトの制作・公開

周年事業に対する考え方や理事長はじめ各設置校長の挨拶、周年動画、実施イベント等を広く周知するため、特設サイトを制作し公開。

ホームページリニューアル

大学サイト・法人サイト・受験生サイト・父母会サイト・松苓会サイトのリニューアルを実施する。

● イベント(講演会・大会・シンポジウム・地域連携等)

漢詩コンクール	一般・学生・生徒等を対象に、漢詩コンクールを実施する。
倉敷市 連携講座	倉敷市との協定に基づき例年開催している連携講座に、2027年度は記念事業の冠を付し開催する。
千代田区 小学生向け書き初めコンクール	地域貢献活動の一環として、大学が区内小学生向けに毎年実施している「書き初め勉強会」を2027年度は「書き初めコンクール」として、広く実施する。
論語と探究【附属柏中学校・高校】	『古典に学び、現代を問い、自ら考える』をコンセプトに、「論語」を軸とした探究学習を実施する。具体的には、湯島聖堂の訪問や大学との連携講演会などの開催を予定。
公益財団法人 美術文化振興協会とのシンポジウム	本学創立150周年と美術文化振興協会設立45周年を記念し、国際政治経済学部と同協会の共催でシンポジウムを開催する。

● 施設整備

九段キャンパスリニューアル	140周年からの継続事業としてキャンパス内各施設の整備・修繕を行い、教育・研究・学修環境の改善に努める。
柏キャンパスリニューアル	今後の「柏キャンパス整備」に必要な不可欠な諸調査を行い、老朽化した大学体育館を含む複数の建物を取り壊し、多様な目的で使える大学運動施設を新たに造る。また、屋外グラウンドの機能向上のための再整備を行う。



● 創立者ゆかりの地とのコラボレーション

中島学区郷土を学ぶ会 書道コンクール(三島中洲顕彰)	三島中洲生誕の地である倉敷市「中島学区郷土を学ぶ会」主催で例年開催されている書道コンクールに、記念事業の冠を付し実施する。
高梁市 三島中洲生齒碑銘の案内板設置	高梁市と連携し、同市にある「三島中洲生齒碑銘」への道程に案内板を設置。

この他の取り組みについても、今後、HPや特設サイト、広報紙等で紹介予定。

二松学舎創立150周年記念募金(教育研究振興資金)への寄付のお願い

学校法人二松学舎では、「二松学舎創立150周年記念募金(教育研究振興資金)」への寄付を受け付けております。寄付金は使途を指定することができ、さらに、税制上の優遇措置が受けられます。お申し込み方法の詳細につきましては、本学ホームページをご覧ください。クレジットカード・ネットバンキングなどでお申し込みができます。専用振込用紙でのお振込みも可能です。なお、遺贈によるご寄付も受け付けております。ご希望の方は、下記までご連絡ください。何とぞ、募金活動の趣旨をご理解いただき、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。



【遺贈寄付について】遺贈とは、遺言書を作成し、ご自身の遺産の一部を特定の人・団体に寄付することです。譲渡先の一つに「学校法人二松学舎」をご指定いただいた場合、ご自身の大切な財産を人材育成に役立てることができます。これまでお預かりしたご寄付は、学生・生徒の学びを支える学校法人二松学舎奨学基金(第3号基本金)として活用され、多くの夢の後押しをしております。また、相続税が非課税となる措置があります。

お知らせ

学校法人二松学舎への多大なるご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。ご寄付賜りました個人および企業・団体・法人のご芳名を、学校法人二松学舎のホームページ「寄付者芳名録」に掲載しておりますのでご確認ください。

遺贈寄付の詳細および「寄付者芳名録」への掲載を辞退されたい場合は、下記までご連絡ください。

企画・財務課

☎ 03-3261-1298(月～金 9:00～16:30)
✉ k-zaimu@nishogakusha-u.ac.jp

永年勤続表彰

10月10日付で以下14名を永年勤続者として表彰した。(敬称略・50音順)

30年表彰

大学職員

小沢 洋之、志津 義弘、
柴田 康一、島田 穂隆、
室井 宏之

附属高等学校教員

市原 勝人、横関 彩子

15年表彰

附属高等学校教員

麻生 修平、立野 淳平、松澤 龍

附属柏高等学校教員

加古 幹雄、福田真美子、武捨 君彦

附属柏中学校教員

岡部真里亜

【 創立150周年記念事業 】 二松学舎オリジナルワイン製作

創立150周年を記念し、新たに二松学舎オリジナルワインを製作いたします。これにあたり、ネーミングおよびラベルデザイン(裏面)を学内関係者の皆様から募集いたします。

応募締切は、2026年11月30日(月)です。
発表は2027年1月中に入賞者に通知いたします。学内刊行物、HP等でも発表予定です。皆様のご応募をお待ちしております。

詳細は、HPにてご確認ください。



設置校NEWS

このコーナーでは、大学、附属高等学校、附属柏中学校・高等学校でのさまざまな行事や学生・生徒の皆さんの様子をピックアップしてお届けします！

大学

2026年4～6月

学びへの第一歩 新入生歓迎行事を各学科で開催

二松学舎大学は2026年度の新入生を対象に、各学科の学びに関連した歓迎行事を実施した。

文学部では、国文学科が4月19日に大藏流吉次郎狂言会による狂言鑑賞会を開催。狂言の鑑賞を通して、日本の伝統芸能に親しんだ。国際日本・中国学科は6月6日、能楽師の安田登氏を招き、能の公演と講演会を実施。日本と中国の古今文化について理解を深めた。都市文化デザイン学科は6月13日、株式会社クロスブリッジおよびAkiba.TV株式会社代表取締役の吉岡有一郎氏を迎え、秋葉原での街づくりの実践例をもとに、地

域や都市の文化とその形成について学んだ。歴史文化学科は4月30日、旧岩崎邸庭園を見学。重要文化財の建築や庭園を実際に見ることで、近代日本の歴史や文化について学ぶ機会となった。

国際政治経済学部では6月13日、国際政治経済学科と国際経営学科の合同で、産学連携先である株式会社フォーバルの執行役員・今西一氏らによる講演会を実施し、地域創生などの事業事例を紹介した。後半には質疑応答コーナーも設けられた。社会人に求められるスキルや人材像について話を聞き、今後のキャリアを考える場となった。



大藏教義・大藏基誠師による狂言「名取川」(文学部国文学科)



地域創生などをテーマとした事業事例を学ぶ(国際政治経済学部)

附属柏高校

2026年6月5日

高2 社会の課題を現地で学ぶ「スタディツアー」

附属柏高等学校2年生は6月5日、社会問題をテーマとした校外探究学習「スタディツアー」に参加した。

川崎重工株式会社が運営する産業用ロボットの展示施設「Kawasaki Robostage」を訪れた生徒たちは、ロボットと人が共存する未来について学んだ。館内のさまざまな産業用ロボットを見学し、人と共に働くことを想定した自律走行型サービスロボットや、医療・医薬分野で活躍するメディカルロボットなどに触れ、技術の進化を実感するとともに、これからの労働環境について考える機会となった。

また、国際交流シェアハウス「BORDERLESS HOUSE 浅草橋1」を訪れた生徒

たちは、多国籍の居住者が共に生活する様子を見学し、多文化共生について考えた。生徒からは「無知や無関心が差別や偏見につながることを知り、自ら相手を知ろうとする積極的な態度が大切だと感じました」といった声も聞かれ、異なる文化や価値観を持つ人々が互いを理解し、尊重することの大切さを学んだ。

午後には、全クラスの生徒が大学の九段1号館に集まり、振り返りのワークショップを実施した。訪問先で得た気づきや学びをグループで共有し、互いの意見を交わすことで、社会問題を多角的に捉え、校外での学びをさらに深める機会となった。



ロボットの有用性の高さに感心する生徒たち(Kawasaki Robostage)



見学後には質疑応答コーナーを実施(BORDERLESS HOUSE 浅草橋1)

附属高校

2026年6月19日

高3 豊かな感性を育む「芸術鑑賞」

附属高等学校3年生は6月19日、JR東日本四季劇場[秋]で、ミュージカル「バック・トゥ・ザ・フューチャー」を観劇した。本物の舞台芸術に触れ、豊かな情操や感受性を育むと共に、集団行動を通して社会性や協調性を養うことを目的として実施された。

本作は、同名映画の第1作をもとに創作されたミュージカルで、世界各国で上演されている。生徒たちは、タイムトラベルを題材とした映画の世界観を再現した舞台装置や、劇団四季ならではの細やかな演出、華やかな歌やダンスを間近で体感し、驚きと深い感動を味わった。



「バック・トゥ・ザ・フューチャー」の世界を体感



芸術の魅力を肌で感じた生徒たち

進路選択の時期を迎える生徒たちにとって、今回の観劇は舞台芸術への興味を深めるだけでなく、自身を見つめ直す貴重な機会となった。

観劇後には、「自分にはできないと決めつけずに行動する大切さを学んだ」「周囲から刺激を受けることの重要性に気づいた」といった感想が聞かれ、今後の進路や人生について考える深めることにもつながったようだ。

附属柏中学校

2026年9月11・14日

16年間のご支援に「感謝の会」を開催

附属柏中学校では9月11日、「自問自答プログラム」における校外学習「田んぼの教室」を長年にわたり支えていただいた附属沼南高等学校(現附属柏高等学校)卒業生の吉野敏幸さん(写真左)と齋藤定市さん(写真右)への「感謝の会」を開催した。

「田んぼの教室」は、開始当初から田んぼを貸し出してきた吉野さんと、稲作の指導に携わってきた齋藤さんの協力のもと行われ、今年度で16年目を迎えた。これまで長年にわたりご協力いただいたお二人だが、現在の形でのご支援は今年度で最後となる。この日は柏1号館5階の講堂に全校生徒が集まり、感謝の気

持ちを込めて花束と色紙を贈呈。お二人からも、本活動や生徒たちへの思いが語られ、会場は温かい拍手に包まれた。

そして9月14日には、中学1年生が稲刈りに臨んだ。当初11日に予定されていた稲刈りは雨天で延期となったが、14日には天候にも恵まれ、生徒たちは慣れない鎌を使いながらも、指導を守り、安全に配慮しながら一株一株丁寧に稲を刈り取った。

春の田植えから稲刈りまでを体験することで、生徒たちは「食」のありがたみや、人と人とのつながりの大切さを学んだ。今後も「田んぼの教室」は新たな形で引き継がれ、実施される予定だ。



全校生徒から花束・色紙を贈呈



青空のもとで稲刈りを体験

2026年度

『『論語』の学校-RONGO ACADEMIA-』のお知らせ

- 日時: 12月5日(土) 14時開演
- 会場: 九段1号館中洲記念講堂
- 講演: ① 一人一人を活かすということ ～魅力的な組織づくりとは～

入場無料・全席自由席

人とホスピタリティ研究所代表 元ザ・リッツ・カールトン・ホテル日本支社長 高野 登氏

② 素読を通して『論語』を味わう

公益財団法人郷学研修所・安岡正篤記念館理事長 安岡 定子氏

右記二次元コードから ※申し込みは12月4日(金)正午まで。定員になり次第締め切り。
お申し込みください。 詳しくは本学ホームページの「News」イベントをご確認ください。

お問い合わせ | 企画・財務課 ☎ 03-3261-1298 (月～金 9:00～16:30)



一 訃 報

謹んでお悔やみ申し上げます。

菅根 順之氏(名誉教授)

2026年6月3日逝去。満92歳。
(1957年～2004年在職)二松学舎大学附属高等学校教諭を経て、1965年に二松学舎大学助手兼学生課長補佐として着任。その後、教授に昇任、学生部長、教務部長、附属図書館長等を歴任し、学校法人二松学舎評議員も務めた。

白藤 禮幸氏(客員教授)

2026年6月8日逝去。満87歳。
(2003年～2009年在職)二松学舎大学非常勤講師を経て、2003年に大学院文学研究科教授として着任。その後、文学研究科長に就任。